

奉ずる形の回船業、もしくは或る種の国産商品の売りさばきに従事したのである。公用で江戸に赴いたのもそのような生活の断面が出ているに相違ない。

従つて一方には「家譜」に書き入れねばならぬような官途歴を自分は持ち合わせていないと感ずる、一種の空しい気持も晩年の巖男の胸にあつたのであろう。「唐人町南部」一家の家譜の記事が、巖男の子供の代で終つてゐる理由も、巖男自身が身辺の記入を試みた所で筆を絶つたという事情によるものと思ふ。

「潮江南部」一家の記事から判断して、「南部一統家譜」の成立について次の事が考えられる。即ち潮江南部家は、或る代（恐らく茂寿の頃）に家伝の記録、口碑を中心にし、それに巖男の筆になる

源氏物語における万葉歌の流伝

——その階梯的考察——

一 序

王朝期諸作品には、しばしば、もはや前代的な文学遺産たる万葉歌が散見される。源氏物語においてもその例外でなく、物語の性質上引き歌でないが、かなり多くを認め得る。いつたい、後世の万葉歌流伝の問題は、万葉享受史の側とそれを含みもつ作品じたいとの、連続するけれども表裏二つの断面をもつてあろう。つまり研究対象として双頭的な位相が示されるわけである。その場合、この双頭的な断面を連続させる何らかの必然的な関係、——享受主体じ

「唐人町南部」一家の家譜をも巖男の手から借り受け、その他も参考にしながら南部一統をまとめて上げたようである。

註一 小関清明氏「南部巖男校本万葉集と万葉集古義」国語と国文学昭31・3

註二 松山秀美氏「鹿持雅澄年譜」土佐史談第四九号

註三 尾形裕康氏「鹿持雅澄」七二—七三頁

註四 拙稿「万葉集古義の前身」古代文学第二号

註五 現に大野見村には南部姓があり、有名な南部静軒その子藤男の出身地である

註六 池甚兵衛氏については不詳であるが、晩年の雅澄の「日記」安政三、四年にわたつて、池華吉方謡曲会興行を聞きに行く記事がある。或は巖男との関係が仲介してゐるであらうか。

註七 平尾道雄氏「土佐藩商業経済史」二七—二八頁（山内家文書）

註八 県立図書館司書高芝氏の入念な調査にもかかわらず「郷土帳」その他に潮江南部家の家族名は見出せない。

註九 松山秀美氏「香美野に於ける雅澄」短歌雜誌九の三、四

鈴 木 日出男

しんの要請と流伝性じたいの関連およびその間に介存するさまざまの具体的な可能性が考えられようが、とにかくある種の媒介による関係がなければならぬまい。そうした必然的ななりゆきのなかで、更にこの双頭的な断面がそれぞれの立場で再び鑄直されてゆくべきである。しかし、「なにゆえに」という必然性の媒介をいきなりその作品に問いかけることはできないであらう。少なくとも源氏物語作者の意識へのそれは、物語じたいが矛盾に満ち過ぎ、あまりに難澁である。そこで、手がかりとして、「どのよう」に流伝されたかをつきとめる必要がある。つまり、万葉から源氏物語への流伝が

どのような方法形式によつて結ばれるのか、本稿のねらいはそこにある。繰り返すまでもないが、それがこの種の問題のごく階梯的な出発点だと思つてからである。

源氏物語中方葉歌の流伝と目される箇所は、これまでも、数多い古来の注釈書はもちろん池田龜鑑¹・山田孝雄²・玉上琢弥の諸氏によつて指摘整理されてきた。そういう先蹤を承けながら、わたくしの調査では六一箇所、歌数では延べ歌数^(重出を含む)が七〇首・実質歌数^(重出を含む)が五〇首となる。右の数の異同は必ずしも一個所対一首の対応とできぬことに起因し、つまり源語の個所一に対する万葉集中のいわゆる重出・酷似の複次関係まで、または源語での重出関係によるからである。また、この調査はある源語本文部分と万葉歌とが直接に結ばれないにしても溯源すればそれにとどり得るとき、かなりの広範囲による。なぜなら、本稿のめざすところはあくまでも源語における万葉歌の流伝にあり、単なる機械的な抽出のみに意味があるのではないからである。

二 外部的分析

まず、万葉集の側に視点をおいて、いわば外部的な分析を試みた。次のI・II・IIIの指標から、万葉集組織体系に還元することである。

I 万葉集巻別

巻	延べ歌数	実質歌数
一	0	0
二	1	1
三	2	2
四	7	4
五	1	1
六	2	1
七	6	6
八	8	7
九	0	0
十	6	6
十一	24	12
十二	7	5
十三	0	0
十四	0	0
十五	2	2
十六	3	2
十七	0	0
十八	0	0
十九	0	0
二十	1	1
通巻	70	50

巻十一が圧倒的で、他に巻四・七・八・十二あたりに偏在する。いかえれば作者不明歌と相聞歌に顕著である。

II 万葉集通巻部立別

部	立	延べ歌数	実質歌数
相聞	相聞	7	4
	相聞	2	2
	古今往来歌	7	5
	正心寄陳	25	13
雑歌	雑歌	9	8
	雑歌	6	5
	雑歌	1	1
挽歌	雑歌	3	3
	挽歌	1	1
譬喻	歌	2	2
	歌	2	2
その他	歌	3	2
	歌	2	2
	歌	1	1
合計		70	50

この分析においては、相聞が圧倒的に多い(なかでも古今往来相聞歌)。

III 万葉集作者別

作者	延べ歌数	実質歌数
人麿	4	3
旅人	2	2
赤人	2	1
大宅娘	2	1
大伴女	2	1
元正又は聖武天皇	2	1
鏡王	1	1
志貴皇	1	1
憶良	1	1
沙弥誓	1	1
長奥	1	1
三家原	1	1
馬国	1	1
遣新羅	2	2
人古	2	1
不	2	2
合計	42	28
合計	70	50

作者判明歌は人麿・赤人・家持にしても少数の散在にすぎず、不明歌に集中する。

以上ⅠⅡⅢから、計量的に、作者不明歌の性格・相關歌恋歌の性格の二つがいえる。なお、前者をいかにみるかは難しく、異論もあるがわたたくしとしては歌の新しさ古さにかかわらず多分に伝誦的民謡の性格を孕み得るものと考えたい。

三 内部的分析

ここでは、より内部的に源氏物語の万葉歌所在の叙述に即して、それじたいについて種々の分析を試みたい。

(一) 分析Ⅰ(位置)

分析項目	数
対話	24
地	23
対話+地	2
歌	7
歌(書簡中)	3
書簡	2
合計	61

文章中形態的にいかなる位置に存在するかを表の如く分類すれば、対話に比較的多いことが知られる。物語虚構において口頭性をもち、いわば現実的な場面構成の核として再現する。同時に、そういう歌が元来口頭のであったことも十分考えられよう。

(二) 分析Ⅱ(内容)

その引き歌個所の叙述はいかなる内容であるか、大きく表のごとく分類すると、人事、なかでも恋が圧倒的に多い。この物語の性質上むしろ当然であるが、そうした傾向を本来もたらあわせていたがゆえにこの再現が可能だとも考えてよいであろう。

以上Ⅰの口頭性・Ⅱの恋は、前節でみた二つの性格にほぼ符合するものである。

分析項目	数
人事	45
恋	6
恋以外	6
背景十人事	5
背景	5
合計	61

A) 語の内部の変遷

語それじたいは変らないが、音韻や語調に明かに歴史の跡がたどられる場合がある。

1 をさなき心地に、いかならむ折にかと待ち渡るに、紀伊守国にくんだりなどして、女どちのどやかなる夕闇の、道たどたどしげなる紛れに、わが車にてゐて奉る。(空蟬・九四頁) 〔対校源氏物語新釈〕本文による。以下同様。) 2 すこし大殿籠りにけるに、蛸の花やかに鳴くにおどろき給ひて、「さらば道たどたどしからぬ程に」とて、御ぞなど奉りなほす。「月待ちてといふなるものを」と、いと若やかなるさまして宣ふは、憎からずかし。(若菜下・八七頁)

夕闇者 路多豆多頭四 待月而 行吾背子 其間爾母將見(〇九七 豊前国娘 子大宅女)

右万葉該当歌が後世に継承され、古今六帖(第一「タヤミ」三)・伊勢集(五八)・新勅撰集(八八三題下)ともに「たどたどし」となる。「道たどたどし」の例は続千載集(八四一編)にもみえるが、「タツタツシ」は王朝歌に求め難い。万葉集中「たどたどし」のないのに対し「タツタツシ」は右該当歌以外に仮名書きの四例があつて、うち三首が後

(三) 分析Ⅲ(語句)

次に、引き歌個所と溯源した万葉歌とを比した場合、語句の異同が一八例ほど見当る。以下次のごとき類型で纏めてみたいが、もとよりこれらはそれ一個の範疇のみに落ち付いて他と相容れぬのではなく、とりわけそれが濃厚だと目されるものである。

世採歌される(11二四九〇—古今六帖三五—九三・一五三六二六一—古今六帖三五—
九四・四五七五—古今六帖三五四二—統後撰集一三・一七・夫木抄卷
六三—一八四〇)。

王朝歌集に伝わる三首の万葉歌が依然「タツタツシ」
のままだが、それは厳密な書承を意味するとは限らない。そのすべ
てが「鶴(ツ)……タツタツシ」と鶴にひきずられた音韻や語調によ
る結果とみられる。なおその六帖歌で「君きまさねば」(三五)・

「独さぬれば」(三五)・「草枯の」(三五四四—後撰)と歌詞異同が生じ
たことにはかなりの伝誦臭が感じられる。この二つの事実はけっし
て矛盾するのではなく、前者は語調的なものに支えられるがゆえにか
えて口頭的な伝承と考えやすい。とにかくいまの該当歌にとつて

鶴は無縁であり、それなりの口頭のな場の流伝が認められよう。京
大本に「タドタツシ」の例外的な訓があるが、むしろ口頭のな痕跡
が逆に入り込んだとみられようか。

3 「撫子のとこなつかしき色をみばもとの垣根を人や尋ねむ
この事の煩はしさにこそ、繭ごもりも苦しう思ひ聞ゆれ」と宣
ふ。(常夏・七八頁)

垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二
不相而(12二九九—)

たらちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹にあは
ずて(拾遺集八九五題不知人唐・古今六帖第二「親」三三二七〇)への

源語「繭」は諸本仮名書きであるから、やはり異同とみなければな
らない。万葉集中「まゆ」はないが、「マヨ」は他に三例(五・一三九
三三五〇)あり、巻十四歌のみ六帖に採歌され「まゆ」になる(第三
三三二—三四)。

以上音韻や語調の変化ともいふべき語の内部の変遷の場合をみて
きた。それは、一種の口頭の伝承を意味するであらう。

A(ウ)語それじたいの変遷
語それじたいに変遷が認められ、本来の生命を失ってゆく例と目

されるものを掲げる。

4 「よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまざる。撫子の花、
花に咲かなむと思ひ給へしも、かひなき世に侍りければ」とあ
り。さりぬべきひまにやありけむ、御覽せさせて、「ただ塵ば
かり、この花びらに」と聞ゆるを、(紅葉賀・二九一頁)

吾屋外爾 薛之體表 何時毛 花爾咲奈武 名蘇経乍見武(四一
伴家持)

「よそへつつ」「ナゾヘツツ」の対応である。これら五音句の用例
を万葉・王朝歌に求めると、前者が右万葉歌以外に皆無であるのに
比し、後者は古今集・源語歌に各二、千載集・蜻蛉日記歌に各一例あ
る。更に前掲万葉歌の流伝の姿をみると、後撰集(一九九題不知
今六帖(第六「なでしこ」)ともに源語と同様「よそへつつ」に変わる。
さらに語としての調査では、「なぞふ」——万葉0・古今0・源語
0、「なぞらふ」——万葉0・古今0・源語1、「なずらふ」——

万葉0・古今0・源語40、「よそふ」——万葉11・古今1・源語32
・紫式部日記2・更級日記1、となる。「なぞふ」は万葉を下って
はもはや死語に近く、一方「なずらふ」「なぞらふ」は生命を保つ
としても四音節語と定形歌との関連によるか、歌語としての用例は
ない。その辺に歌語「よそふ」の存在理由があるらしく、万葉以来
衰退することがなかった。流伝する歌が語の死滅誕生する言語世界
を敏感に反映する。裏がえしていえば、歌のそうした馴致性は伝誦
的なものの結果とみられよう。なお、類聚古集・温故堂本、細井本
・京大本にみられる「よそへつつ」はそうした場からの反映である
うか。

5 あづまの調べを嘗掻きて、「玉藻はな刈りそ」と謡ひすさび
給ふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまな
り。うちにも、ほのかに御覽せし御かたち有様を、御心につけ

給ひて、「赤裳垂れ引きいにし姿を」と、憎げなる古言なれど、御ことぐさになりてなむながめさせ給ひける。(真木柱・二二四頁)

立念 居毛曾念 紅之 赤裳下引 去之儀乎(江三三五〇) 正忒心體

「たれひき」「スソヒキ」の対応である。後世の採歌では古今六帖(第五七九)・新勸撰集(九四二題不知)ともに「たれ」を示す。万葉集中の「たれ」「スソ」を用字に着目しながら整理すると、「スソ」

— 欄5・裾2・裾2・下2・須蘇3・須素3・須曾1・須十1、「スソビク」— 須蘇妣伎1・須蘇毘伎1・須蘇延1・須蘇婢久1・須素引1・數十引1・下引1、「たれ」— 垂6であり、「たれ」と訓むべきは「垂」のみといえる。ところで「下」を「たれ」と訓み得る例がないだろうか。が、その二例、早起出乍吾裳下閤奈(三五七)・未通女等赤裳下閤將往見(七四)は「スソ」と訓まざるを得ない。次に万葉集において「スソ」と「裳」との関連を調査する

と、表のごとく数量的に緊密であることが知られ、特に「赤裳」に対して著しい。王朝作品の「スソ」は、古今集1・竹取物語1・伊勢物語1・源氏物語16・紫式部日記23、と数えられるが、このうち源語の二例のみが「裳」と承接する。ここに、万葉における緊密さが時代の経過に伴って崩れゆく相がある。同時にこの場合の異同を必然たらしめるであろう。なお細井本・京大本に部分的な訓「た

分類	裳	赤裳	しき裳	玉裳	御裳	新裳	計
「スソ」	6	7	0	4	0	1	18
右以外	2	1	1	2	1	0	7
計	8	8	1	6	1	1	25

れ」がある。

6 雨降りやまで日頃多くなる頃、いとど山路おぼし絶えて、わりなく思されければ、親のかふこは所せきものにこそ、とおぼすもかたじけなく、(浮舟・二二六頁)

万葉集本文は前掲3に等しく、ここでは「母」「親」の対応がみられる。すでに3で掲げた拾遺集・古今六帖・柿本集もすべて「親」とずれる。「たらちねの」「かふこの」に承接する歌例を整理して知られることは、「母」との承接が稀薄になり、新たに「親」と

親		母		新古2	
右以外	2	23	0	0	2
古今1拾遺2	0	5・12二九九・13三二五八、八	代集ナシ	「親のかふこの」	万葉集ナシ、拾遺八九五

の組合わせが作られてくることである。元略校本・類聚古集・西本願寺本・細井本の部分的な訓「オヤ」には、かえて伝誦歌的な口吻が考えられよう。京大本「オヤ諸本如此」の註書はそれへの批判的な考慮であろうか。

7 おとども御覽じて、「なか里居は久しくしつる。例ならずやもめ人の、引きたがへ、こまがへるやうもありかし。をかしき事などありつらむ」など例のむつかしうたはぶれごとなど宣ふ。(玉鬘・三八六頁)

朝露之 消安吾身 雖老 又若反 君乎思將侍(江二六八九) 露霜乃 以下同右(江三〇四三寄物陳息) 万葉酷似歌二首の「若反(返)」は「ヲチカヘリ」と訓むべきを、源語に「こまがへり」とある。万葉にはもう一例「石綱乃又変若反(変

著反(類聚) (四六)とあるが、「こまがへる」はない。王朝以後、歌に「こまがへる」を見出し難いが、「をちかへり」五音句は五例(千載集一八九・続後拾遺集一二七・同四)あつて、「もとへ戻る・再び来る」の意味で、しかも四例はその主語時鳥と承接する(前掲歌五首中、続後拾遺集四四五首中「二十後」)。また源語中の歌一首(花散里四)も必ずしも若反るの意味でなく時鳥と組合わされる。「こまがへる」は頻出する一般的な語彙でないとしても、「をちかへる」の用法には変遷があつたようである。

Aの歌枕の変遷

8 笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎ給ふにつけても、
何か何か心づくしなり。(葵・三三〇頁)

9 御使は、木幡山の程も、雨もよにいと怖しげなれど、さやうの物怖すさまじきを、えり出で給ひけむ、むつかしげなる笹の隈を、駒引きとどむる程もなく打早めて、片時に参りつきぬ。
(椎本・六七頁)

左檜隈 檜隈河爾 駐馬 馬爾水令飲 吾外将見^{12三〇九七}
(寄物陳思)

「サヒ」「ささ」の対応である。後世、古今集(一〇八〇)・神楽歌(靈女の歌)に伝えられ「ささの隈」とある。また万葉集中「サヒノクマ」は他に二例(七二・七五九)ともに仮名書きとしてあるが「ささのくま」はない。なお八代集では双方見当らない。接頭辞サの付いた「檜の隈」は大和国高市郡檜前郷で、和名抄にも「檜前郷」とみえる。小西甚一氏は前掲神楽歌を扱われた際「著明な場所と記憶すればよかつた」と見え、実際の地理的知識はかなり貧弱だったらしい。この場合は地名そのものがあやふやだった」といわれた。広く地名の異同は伝誦歌の一特性と考えられようし、さらにこのばあひ日霊女の歌として神楽歌となつた事実を併せれば右の性格は一層顕著である。

10 いふかひなくて、いとまめやかにゑじ聞えて出で給ふも、い

と若々しき心地し給へば、「いと斯く世のためしになりぬべき有様を漏らし給ふなよ。ゆめゆめ。いさら川などもなれなれしや」とてせちにうちささめき語らひ給へど、何事にかあらむ。
(朝顔・二八四頁)

狗上之 鳥籠山爾有 不知也河 不知二五寸許瀬 余名告奈
(112710)

(寄物陳思)

「いさら川」「イサヤ河」の対応である。後世、古今集(一〇八)・古今六帖(第五「名を惜しむ」三)に伝えられるが、その該当異同部分を整理すると、「イサヤガハ」(堂古今和歌集注)・「ナトリガハ」(古今)・「イサラガハ」(古今集元本)・「イササガハ」(古今)の種々相を示す。なお万葉に「イサヤガハ」はもう一例(八七四)同様書式としてある。これも前例同様稀薄な地理認識だが、古今集左注(かどあふみのうねめにたまと)・六帖作者名(みかど)はその背後に説話を背負つた古代の伝承を感じさせる。さらに、「いさと答へ」「いさ□川」が音韻語調的に承接し(結句「わが名」と承接する)、「や」「ら」「さ」の異同が技巧上の効果としては同様な、この種々相は汎大な伝誦圏を示すにほかならまい。

11 「峯の雪みぎはの水踏分けて君にぞまどふ道はまどはず 本
幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯石し出でて手習し給ふ。
(浮舟・一二三頁)

山科 強田山 馬雖在 歩吾来 汝念不得¹¹²³⁴²⁵
(寄物陳思)

「こはたのさと」「コハタノヤマ」の対応である。この歌が流伝し、拾遺集に「木幡の里」(不知・人題)、古今六帖に「木幡の森」(第二「五人題」とそれぞれに一定しない。なお源語にはもう一個所この歌が引かれ「木幡の山に馬はいかが侍るべき」(三九頁)とあつて万葉に符合する。こうした種々相は、やはり前例歌枕同様伝誦によるとみた方が自然であろう。つまり、このばあひの「里」が拾遺集によ

ったと考えることは必ずしも当るまい。

以上、語句のずれの一つとして(イ)(ロ)三点から調査し、語彙の変遷との関連でその口頭の伝承性を述べてきた。

B他歌集の紹介

王朝期に流伝した万葉歌が他文献にあり、それと異同語句とが等しいばあいである。勿論前述Aも同様の傾向を示すが、前者はそれよりもさらに語として執着した型とみられた。

12 御文にも、いと懇ろに書いて給ひて、「かの御放書なむなほ見給へまほしき」とて、例のなかななるには、あさか山浅くも人を見はぬなど山の井の井のかけ離るらむ 御かへし 汲み初めて梅しと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき 惟光も同じ事を聞ゆ。(若紫・一九九頁)

安積香山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国(〇七三)

浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人をおもふものかは(古今六「山の井」三三八六一、小町集「九六七」今昔物語一八六八)

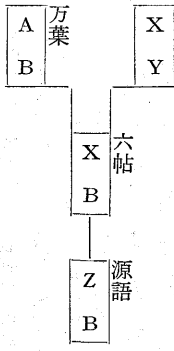
「灘波津」の歌とともに手習歌として人口に膾炙されたことは古今集序(「あさかやまのことはは、うねめ」)によっても知られる。さて、とくに源氏の歌「浅くも人を見はぬに」は明かに王朝諸作品のばあいに近い。尼崎本で「あさくはころを」としながらも「くは」二字を消し、右に「き」としたのは、むしろ前者を民間的なものとして訂正したのではないか。だとすれば、前掲王朝歌も源氏の歌も一層私的伝承性を帯びたものであろう。また、古今六帖その他の異同と等しいとしても、それらからの書承とは限らない。

13 手などの、いとわざとも上手とは見えで、らうらうじくうつくしげに書き給へり。身に近く秋や来ぬらむ見るままに青葉の山も移ろひにけり とある所に目とどめ給ひて、みづとりの青葉は色も変らぬを萩のしたこそ気色ことなれ など書き添へつ

つすさび給ふ。(若菜上・三三八頁)

秋露者 移爾有家里 水鳥乃 青羽乃山能 色付見者(八二五四三) 白露はむべしなりける水鳥の音羽の山の色つくみれば(古今六帖月三二)・白露はうつしなりけり(以下同前)(古今六帖第二山〇四六)・紅葉する秋はきにけり(以下同前)(古今六帖第三水みき)・紅葉する秋はきにけり(以下同前)(古今六帖第三水)

もとり古今六帖には、同一万葉歌に溯源できる歌が互いに多少の異同をもちつつ、いわゆる重出される例が少なくない。改め後考すべきだが、わたくしはそれを伝誦に媒介された流伝の諸相とみたい。このばあい「音羽」「青羽」などに変化しながらかなり強力に流伝されと目される。こうした背景のなかで図のごとき模型を考えることができよう。が、六帖とは文献に限らず、そういう歌でさえあればよいのである。



である。

14 中将、「つつむめる名や漏り出でむ引き交はしかくほころぶる中の衣にうへに取り着ばしるからむ」といふ。(紅葉賀・三〇三頁)

紅之 深染之衣 下著而 上取著者 事将成鴨(七二三) 紅の濃染の衣下にきて上にとりせばしるからむかも(古今六帖第五〇四七)

各歌をA B C D E(万葉集)・A B C D X(古今六帖)で表わすとすれば、後者下二句D Xによる。このばあいもあくまで文献に拘泥する必要はない。

15 「声待ち出でたる」などあり。「咲ける岡辺に家しあれば」など引きかへし慰めたる筋など書きませつとあるを、取りて見

給ひつつはほろみ給へる、恥かしげなり。(初音・七頁)

梅花 開有岡辺爾 家居者 乏毛不有 鶯之音¹⁰八二〇

源語のごとく「居」を「あれば」とは訓み難く、「有」「居」の混同

つまり万葉仮名の無視がある。諸本や注釈書類の訓みにも「有」の

ごときそれは皆無である(「イヘキセハ」類・寛「イエキセハ」神「イヘイ」。

古今六帖では「家しあれば乏しくもあらず」(第三五二八「うぐひす」)・風雅

集には「家居せば乏しくもあらじ」(四五五題不知)とあるが、源語の異

同は前者に等しい。「居」を「キル・ラル・ス」とするのはい

いが、「アリ」は本文の無視にほかならなく、このばあいも少なく

とも組織的な万葉集と結びあうものでない。

16 端のかたについゐて、「こちや」と宣へど、おどろかず。「入

りぬる磯の」と口ずさびて、口覆ひし給へるさま、いみじうさ

れてうつくし。「あなにく。かかる事口馴れ給ひにけりな。み

るめに飽くはまさなき事ぞよ」とて、人召して、御こと取り寄

せて弾かせ奉り給ふ。(紅葉賀・二九二頁)

伊勢乃白水郎之 朝魚夕菜爾 潜云 鯁貝之 独念荷指天(七九

八寄物 陳思物)

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽くよしもが

な(古今集六八三題 不知 読入不知)

各歌をA B C D E(万葉)・A B C X Y(古今)で表わすとすれば、この

ばあいはX Yによるものである。すでに万葉としての姿はみえない

が溯るとそれにつきあたる。また、この歌は古今六帖(三七七八)・新勅

撰集(四七)・夫木抄(七五)にも伝わるが、ほぼA B C D E型を崩して

いない。流伝された歌が一方においては原歌とほぼ密着した姿であ

りながらも他方では右のごとく真つ二つに切断され崩れていった類

型は、古今六帖万葉歌にも相当数認められるが、伝誦歌の最も自然

な一つの型と考えられると思う。

17 「いでや、さやうにをかきかたの御笠宿にはえしもやとつ

きなげにこそ見え侍れ。偏へに物づつみし、引き入りたるかた

はしも、ありがたう物し給ふ人になむ」と見る有様語り聞ゆ。

(末摘花・二四一頁)

妹門 去過不勝都 久方乃 雨毛零奴可 其乎因將為(二二六八五)

催馬楽に「婦が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我が行かば 笠笠

の 笠笠の 雨もや降らなむ 郭公 雨やどり 笠やどり 舎りて

まからむ 郭公」(四六「婦」とある。二首をA B C D E(万葉)・A B :

；P Q R S T(樂)とすれば、いまP Qによる。催馬楽じたいの口

頭性も併わせ、明かに口頭伝承の趨勢がある。

18 ひとつとなく大宮人のこひしきに桜かざし今日も来にけり(須

磨・四九頁)

百礮城之 大宮人者 暇有也 梅乎挿頭而 此間集有(一〇一八八三)

かなりのずれであるが、これに適當するのは新古今集(一〇四「赤

人集(七二)の「もしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日も

暮らしつ」であり、四句以降の異同、作者を赤人とする点などから

民間的な伝承が考えられよう。古今六帖(三七五)にも採歌されるが、

万葉の歌句をほとんど崩していない。前例同様伝承の諸相として口

頭性が感じられる(赤人集には万葉卷十歌の一部がほぼ元の配列で採歌さ

す)。以上Bとして述べてきたのは少なくとも万葉集からの直接的な書

承でないことである。さらに他歌集からの書承よりもむしろもつと

口頭的な場を媒にしたのではなかったか。とくに前掲12 13 16 17など

は著しい。口頭伝承という点でこのBの分析と前述Aの分析とは符

合する。さて、これまでA B いづれにせよ異同部分をその対象とし

てきたのだが、そうでないばあいはどうか。有力に書承が考えられ

ねばならぬか。いや、そうではない。大体が万葉歌のその部分が王

朝歌集にあつてほとんどを異同を生じない現象を認めうる。引き歌

はもとより部分的であり、そこに異同なきばあいも多くあり得る。

(例) 分 析 (叙述)

引き歌の所在する周辺の叙述に着目し、万葉歌をうけとめる「場」について考えたい。

A 「謡ふ」

「謡ふ」などという明確な口頭の要素をもつ叙述が次に示す如く五例ある。

- 1 朝ぼらけ霧立つ空の迷ひにも行き過ぎがたき妹が門かなと、うたひたるに、(若紫・二一四頁、寄物陳思、11二六八五)
- 2 入りぬる磯のと、口ずさびて、(紅葉賀・二九二頁、四賢論歌、漢、寄)
- 3 佐野のわたりに家もあらなくにと、口ずさびて、(東屋・六八頁、歌・長奥應)
- 4・5 「催馬楽—歌謡」(末摘花・二四一頁、須磨五三頁、11二六八、六八、五寄物、陳思)

万葉歌のあるものが当時吟誦されたことを十分推理させる。作中人物の「謡ふ」ことによる場面構成をどうみるかだが、虚構的なもの強調というよりはむしろかえって口頭のな世界を媒に物語が実生活に結びついているのではないか。それは和歌の現実的な機能を意味するだろう。これは前述の分析Ⅱ「対話に多い」ことと符合するものである。

B 「手習」

- 1 御文にも、いと懇ろに書い給ひて、「かの御放書なむなほ見給へまほしき」。(若紫・一九九頁、16三八、〇七三八)
- 2 手習などの乱れうち解けたるも、咲ける岡辺に家しあれば「など引きかへし慰めたる筋など書きませつつあるを、(初音・10八二〇、八二〇、春雜歌詠鳥)

- 3 打解けたりつる御手習を、硯の下にさし入れ給へれど、(若菜上・三三八頁、8一五四三)

4 木幡の里に馬はあれど、などあやしき硯召し出で手習し給ふ。(浮舟・一二三頁、11二四二五)

手習は本来文字練習を意味するのだが、組織的でなく歌を写すことでもある。断片的なその作業は、さらに和歌の享受と制作とが微妙に重なりあい、その点で口頭伝承に近い。これがいわゆる民間伝承を推進した一つの形態であったと思われる。

C 「古歌(ふるごと)」

- 1 あはれなる古歌ども書きませで、(初音・七頁、10八二〇、春雜歌詠鳥)
- 2 赤裳垂れ引きにし姿を」と、憎げなる古ごとなれども、(真木柱・二一四頁、11二五五〇、寄物陳思)
- 3 「我は忘れず」など、世と共のことぐさになりて、(玉鬘・三五九頁、7一三〇、雜歌、釋旅作・古歌集)

万葉集という組織的な歌集の意味でなく、古歌という概念でとらえられる。古歌への意識や場面における引き歌の機能に關することで当面の問題でないが、古歌とはいえその点ですこぶる現在の現実的生命的である。たとえば右の2(前述A口の項)などはその好例といえる。むしろその意味で現実的であるからこそ、文献を離れた古歌継承が必然化されるのであろう。

D 「諺」的叙述

引き歌個所が断片でありながら成句的で、即座に原歌への溯源が可能でなければならぬもの、いま仮りに「諺」的叙述と名づけておく。

- 1 まだ知らぬ事なる御旅寝に、おきなが川と契り給ふよりほかの事なし。(夕顔・一三二頁、20四四五、八馬園入)
- 2 生ける世にとは、げによからぬ人のいひおきけむと、(須磨

・三五頁、⁴四六〇

3 いざら川などもなれなれしやとて、せちにうちささめき語らひ給へど、(朝顔・二八四頁、¹¹二七二〇)

4 今日ばかりは斯くてあらむ、何事も、生ける限りの為こそあれ。(浮舟・九八頁、^{右の2}に同じ)

たとえば2と4には「恋死なむ後は何せむ生ける日の為こそ妹を見まく欲りすれ」であるごとく、それぞれに全体の歌意が濃縮された形で示される。わずか一句を出しその裏に元の歌意をひびかすのだが、元歌に溯源できないとその周辺の叙述は無意味であり本来の意図は叶えられない。もっとも、引き歌のほとんどがそういう性格を多少なりともつてあるのが右はその典型的な例といえる。作中人物や読者によって溯源されるということ、じつはそこに文学の実生活への慣用性がある。かつ、そういう慣用性が非組織的な万葉歌伝承を支えるものであったろう。

E 対応叙述

一つの引き歌がもう一つの引き歌とともに並び、対応している叙述である。仮りにいま対応叙述と名づけておく。

1 源氏〔万葉(八四)〕↑↑命婦〔古今(七六)〕(紅葉賀・二九一頁)

2 紫上〔万葉(七三)〕↑↑源氏〔万葉(九八)〕・古今(三八八)〔紅葉賀・二九二頁〕

3 頭中将〔古今六帖(三三九)〕↑↑源氏〔万葉(一〇七)〕(紅葉賀・三〇五頁)

4 源氏〔万葉(一一六)〕↑↑御息所〔古今(九八)〕(賢木・三八七頁)

右の1を例にとれば、「よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまさる。撫子の花、花に咲かなむと思ひ給へしも——」と源氏の書簡

があるのに対し、命婦が「ただ塵ばかり、この花びらに」と応ずるところに、引き歌をふまえた源氏と命婦の対応がある、とするのである。この類型はまず右四例だが、次に二つの対応が同一の万葉歌でなされるばあいがある。最後6の例は人物のみならず、地の文まで及び三つの対応となる。

5 〔万葉八五四三〕紫上↑↑源氏(若菜上・三三八頁)

6 〔万葉四七〇九〕源氏↑↑女三宮↓地(若菜下・八七頁)

この対応叙述については更に後考に譲りたいが、対話や書簡文にほとんどが集中するとともに(6型の対応は少ない)、他に較べて即興性が強い。いわば記憶に裏うちされたといえようか。歌に即していえば、現実的実用的な位置を占め、物語に即していえば、作中人物の心理的起伏を重層する形式で独自に場面を構成する。万葉歌が一回的なものでなく流伝していった背景として現在の時間と何らかの意味をもつとすれば、一つに右のごとき応用性、実用性を指摘できるであろう。

以上みてきたⅣ叙述分析では、A明かな口頭性・B民間伝承に支えられた断片書承・C組織を離れた万葉歌享受の意識・D慣用性・E応用性実用性が認められ、それらはすべて万葉歌の口頭的伝承に結びつくもの、収斂されるものである。

四 結

これまで述べたことは、外部的分析三つによる「相聞歌・恋歌」と「伝誦」というめやす、部分的分析ⅠⅡによる「口頭性」と「恋」の暗示、ⅢⅣでは「恋」の要素を内包しつつも「口頭の伝承」の世界である。そしてこの帰結を積極的に肯定できよう。ただここで触れねばならぬことに古点の問題がある。が、それは今日推定のそれであり、しかもその推定はいわゆる誦伝歌口吻と重なりあ

うばあいが多い。したがって、むしろ右の帰結の方がより自然と思われる。たとえば、語句異同のさい触れた、諸本のある部分の伝誦歌的な訓が示唆するところでもある。

こうして源氏物語における万葉歌の流伝を可能にしたのは口頭伝承という方法であった。書物との対峙からくる単なる書承でない。その過程がいかに伝承のさまざまな波にゆさぶられたかを、たとえば語句の異同がその痕跡として物語ってくれるであろう。そこには書承にみられる厳密な冷酷さとはちがった、生きた人間の吐息が聞かれる。文献としての万葉集本文からみてそれが屈折や損傷であればあるほど、この歌の伝承の場が源氏物語作者に肉迫した現実の世界であるのとらえてよいであろう。そういう口頭伝承によって掘りおこされるさまざまな意味については別稿に改めたいが、以下おぼえがきとしていくつかをなぞってみたい。

翻えって、口頭伝承と恋の歌との結びつきの点においては、古今集仮名序の名高い一節に示された「色好みの家」の伝統と根深く関わる。公的な晴れの文学たる漢詩文に蹴落され、陽の目をみなかった和歌暗黒の時代であったわけだが、古今集成立は漢詩と和歌との位置を等質的に単におきかえたような和歌復活ではあるまい。古代において和歌とはそれほど単純ではなかったはずである。葵の文学たる和歌を複雑微妙に晴れの文学にすりかえていった事情は十分に考察されてしかるべきである。つまり、その一つとして、「色好みの家」における要請や本質を古今集および以降の勅撰集が全的に継承発展させなかつたであろうことは想像に難くあるまい。そういう勅撰集の和歌復活によって十分満たせなかつた欲求の部分をも含めて、葵の文学があくまで葵の文学の場において制作享受の二面にわたって営まれていたにちがいない。ここに、国風暗黒の時代を這い進み得てさらに継承していったであろう、いわばより民族的な和歌

固有の伝統を重視したい。そのような和歌は、漢詩文との対立、さらに勅撰集の晴れがましさと対立しそうな、それゆえにもっと自然な人間の営みに支えられた面質を多分に孕み得たであろう。源氏物語の万葉歌はそうした意味での口頭伝承と結ばれると思われる。つまりは口頭伝承とそこから引きだされそうなより人間的な精神性と、更にそれを聞かせる身近な現実との重なりあいではなかつたろうか。

この限りにおいて、ひとり万葉歌だけにとどまるのではなく当然和歌全般に關つてくるだろうし、源氏物語作者にとつては厳密に万葉歌であるか否かはさして問題でないのかもしれない。はたして源語には万葉集に対する少なくとも表だつた意識は語られない。むしろ、たとえば「ふるごと」という概念によつて示される、作者をとりまく歌群それじたいが大事なのである。古歌を意味する「ふるごと」は十数例あり、詳しくは別稿に譲りたいが、なかでも父八宮亡きあとの宇治の姫君たちが「げにふるごとぞ人の心をぶるたよりなりけるを思ひ出で給ふ」（総角九〇頁）と語られる叙述など注目に価する。その歌をいかにうけとめ乗り越えてゆくかを別問題としても、伝承歌それじたい、直面した現実として生命的であり得る。それじたい古歌であっても、けつしてひからび枯渇したものなのでなく、逆に現実と結びあい肉迫する世界であつた。

引き歌としての万葉歌の問題が、たとえば和歌機能と場面構成などに切り開かれてくるだろうが、それとは別に万葉と源語が引き歌を離れてかなり素材的にも結ばれるばあいがある。よくいわれる例として浮舟物語と巻十六有由縁歌がある。このばあい精細に叙述を分析すると巻十六該当歌以外にもさらに一連の万葉歌がその独自の影を落しているようである。もはや具体例を挙げるいどまがなく稿を改めざるを得ないが、そのばあい歌詞そのものでないにしろ、

歌による、しかも口頭伝承を媒にするとみた方が自然のようである。むしろ、数々の引き歌によって示される流伝が口頭伝承であつてみれば、そのばあいも歌にまつわる以上同質の方法によると考へやすい。

ここまできると、源氏物語じたいに即した問題は更に展開されるであろう。同様に万葉の側からも、伝承歌の何たるかをたぐりあげることによって万葉集の本質の一面にふれ得るであろう。そういう意味で序節で双頭のな位相としたのだが、とにかくさしたつての両側面にわたる階梯的な考察として、源語における万葉歌の流伝は口頭伝承という方法によるものであつたらうことを結びとしたい。

1 「万葉集と源氏物語」(春陽堂「万葉集講座」所収)

2 「源氏狭衣の物語類と万葉集」(日本文芸と万葉集「所収」)

3 「源氏物語の引き歌」(中央公論社)、「源氏物語事典下」(東京堂)の「所引詩歌伝典」の項

「事典」の掲げる万葉引き歌は、引き歌箇所四九・延べ歌数五六・実質歌数四一(以上わたしの計上による)である。個数と延べ歌数の異同は箇所一に万葉歌二首を当てる場合があるから、それは次の七箇所である(帖名・頁(源氏物語大成・万葉歌巻番号の順))。

- 夕顔一八・七二〇七二、7一〇八四、○若紫一七九・一一二七四五・一一二九九八、○須磨四二・四五六〇・一一二五九二、○少女六九七・四五〇一、一一二四一五、○玉鬘七四二・一一二六八九・一二〇四三、○総角一六一・一一二七四五・一二九九八、○浮舟一八七四・前掲須磨に同じ

4 玉土孫弥氏前掲二書を中心に、吉沢義則氏「対校源氏物語新釈」・池田亀鑑氏「明日古典全書・源氏物語」などを参考に補充する形で抽出した。「事典」以外に採つたものを次に掲げる(前例3と同様書式)。

- 帯木五八・一一二七九八、○若紫一八四・一一二六八五、○末摘花二〇八・前掲若紫に同じ、○紅葉二五・前掲帯木に同じ、○花宴二七一・七一二五八、○賢木三三六・四五〇一、一一二四一五、○須磨四三五・前掲若紫に同じ、○明石四七七・一五三三八・一五三六一五、○若菜上一〇七七・八一五四四三、○夕霧二二一六・二一九四、○夕霧二二三八・五八九一、○宿木一七二・一一二五四一

以上、個所数二一・延べ歌数二四・実質歌数九、これをさきの「事典」とかみあわせると、おのおの六一・七〇・五〇となる。

5 個所数と延べ歌数のちがいは前掲3・4参照

6 最近では、たとえば森脇一夫氏「万葉集巻十一・十二作歌年代考」(語文第二十輯)・「天平のみやび」(語文第二十一輯)があり、歌語の新しさを根拠に作歌年代を奈良朝前期であるとし、さらに民謡集であることを否定された。

7 これを掲げるが、問題とすべき万葉・源語異同部分については源語諸本間異同があればそれを参照する本針にする。しかし全体にわたり異同がなく、その必要はない。

8 「古代歌謡集」(古典大系)三六一頁

9 中西進氏「古今六帖の万葉歌」一三三頁

10 万葉歌には直接関係しないが、最近の小町谷照彦氏「幻」の方法についての試論(日本文学六五年六月)は、場面をとおして和歌による作品解析を試みられ、多くの示唆に富む。

(付記) 本稿は三十七年二月一七日上代文学会研究発表会において口頭発表したものに、後日補訂を加えたものである。